

原作・脚本・鎌田東二(本作は、1970年に作上演した「ロックンロール神話考」を改作したものである。なお、本作中の歌は、早川義夫作詞作曲の「墮天使ロック」以外の歌の作詞作曲歌唱はすべて鎌田東二によるものである。)

出演者

おのころ村の住民3人

- ① 良夫(よしお)
- ② 悪売(あくめ・女性)
- ③ 流太(りゅうた)

狂言廻しⅡ天気予報官・天気見太郎(てんき・みたらう)

イザナギ

イザナミ

少年少女探偵団員

- ① ルリア(少女)
- ② ジョバンニ(少年)
- ③ 都留女(とどめ、少女)
- ④ 鯉太郎(こいたろう、少年)
- ⑤ Dog・クイア(性同一性障害の少年・少女? 異星人? 宇宙人?)

異界人

- ① ニーチェ
- ② 空海
- ③ おつる(阿波人形浄瑠璃「傾城阿波鳴門」)
- ④ マッチ売りの少女こと実はモッキリ屋の少女コバヤシチヨシ
- ⑤ 番場の忠太郎
- ⑥ デロリンマン
- ⑦ 宮沢賢治

日本列島のどこかにある「おの」る村」

悪売「商売、あがったりだよ。こんな、お天気じゃよう。作物も、売る物も、盗る物もなんにもねえ。干上がっちゃったよ、もう。どうなってんだ、この世はよう。もうお手上げかい。」

良夫「アクメよ、そんなときだからこそ、おらたち、いっしょけんめい、おてんとさんのしたで、がんばるんだよ。笑う門には福来たるだよ。わはははは。わはははは。ワー、ハッ、ハッ、ハッ、ハッ！　がんばんべー！」

流太「とはいえのう、ヨシオよ。おらたち、もうなにをしてもダメなんじゃねえのか？　なにをしても、なにもできねえよ。アクメが言う通り、おれたち、干上がっちゃったのさ。」

むかしむかしあるところに、不思議な樹と巖(いわ)と泉があつて、それぞれ、実に立派な威厳をもつて、互い自慢をしてだんだつて、さ。

俺は、世界一高い樹だぞ、僕は世界一大きな堅い巖だよ、わらわは世界一きれいでおいしい水の湧く泉よ、と、ね。

だがそれも、いつしか、樹は斬られて家や机や椅子になり、巖は割られていろんな道具にされてしまい、泉は汲み尽くされて、もう水一滴も残されていない、だと。

そんな世の中になってよう。この世は「末世だ、末法だ！」と叫ぶ荒法師たちが跳梁跋扈するようになってさ。もうみんな、世も末じゃ、親が子を殺し、子が親を殺し、あらゆるものが殺しあう、手のつけられねえ世の中になっちゃったのさ。」

悪売「リュウタの言う通りさ。もう、どうにも、こうにも、手がつけれないのさ。」

良夫・悪売・流太「かみさま、ほとけさま、ごせんどさま、まんまんちゃん、なんとかしてくだせー！　おねがいっす。おねがいっす！」(と叫ぶ)

——そこへ、狂言廻しの流浪人の天気予報官・天気見太郎がやってくる。

天気予報官・天気見太郎「ぼくは由緒正しき天気予報官です。国際天気庁の事務次官まで務めた大変優秀な天気予報官であり、天気情報収集官でありました。

でも、去年、コロナ制約が解除され、それとともに突然、われらの仕事も解除解約されてしまったのです。

もう、この先、天気予報の仕事がない、と判断されたのです。なにしろ、天気がないのですから。嗚呼、かなちいなあ。」

かくして、国際天気庁は解体。各国天気予報官は、みんな、てんでバラバラ。各地に散っていきました。そこで、どうしているか、もはや消息不明で「ごります。」

「悲の岬」(を朗詠)

月光は黄泉路を越えてきた。満月を串刺しにしたまま血を舐めている処刑台の山猫は何に向かつて吼えているのか。月夜に還ってゆく何処の島がある？ 故郷への道は塞がれたまま魂の難民は国境線で不安と恐怖の夜に怯える。全世界を覆う電脳もこの怖れの暗渠をほぐすことはできない。絶対零度の深海闇夜。癒しなどどこにもないのだ。救いがあると思えば無力に震える独りの夜を無為に過ごすのを見届ける自己があることのみ。深遠を呼び覚ますモノが存在するとしたら黄泉路を越えて自己を突き通す無限遠点のまなざしと意思を植えたこと。超越の波動が悲の受精卵を苦の岬から突き落とす。満月に向かつて悲しく聳え立つ母之理主(モノリス)よ、応答せよ、応答せよ、応答せよ！

「探すために生きてきた」(狂言廻しの天気予報官を中心におのころ島村人とともに歌う)

へ 探すために生きてきた 道を求めて生きてきた
夢を求めて生きてきた 愛を求めて生きてきた

1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 果てしない 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 切りがない
1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 とめどない 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 道がない

探すために生きてきた 探し求めて生きてきた
時を求めて生きてきた 闇を潜って生きてきた

1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 果てしない 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 切りがない
1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 とめどない 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 終わらない

探すために生きてきた 探し求めて生きてきた
路を求めて生きてきた 夢を求めて生きてきた

1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 果てしない 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 ときがない
1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 あてがない 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 みちがない

探すために生きてきた 探し求めて生きてきた
夢を求めて生きてきた 道を潜って生きてきた
愛を求めて生きてきた...

天気予報官「今日は朝から曇りのち晴れ。山間部ではときどき小雨も降るでしょう。時には、カミナリも鳴り響くでしょう……」と言っている間に、感極まったのか、しくしくと泣き始める……みなさん、もう、そんな牧歌的な天気予報はできなくなってしまう。みなさん、天気は死にました。天気は死にました。わたしたちが、わたしたちが、殺してしまったのです。」

「みなさん、天気は死にました」(天気予報官が朗詠)

「みなさん 天気は死にました」

と 高校三年生の田村君は 言った

その田村君は 生きているか？

五十年も昔のこと

荒れ狂う天地万物

林檎よ

縁は異なるもの味なもの

そのとおりだが

でもね

死んだ天気も 縁次第

そのように なって そのように ある

あるべくして ある なるべくして なる

世界はそのようにつづいている 縁はそのようにはたらいっている

1ミリーセンチたりとて恣意的ではない

成るべくして成る 在るべくして在る

ありをりはべりいまそかり 青森カルシウムはどこ行った？

臼田甚五郎は飛びのいた 大森から青森まで

その飛躍こそが猿楽芸能 天狗舞 マイトレーヤ

そは如是我聞 聴くべき耳を研いた 研磨研耳

いかつこなく いかしまぐはひのこと

弘前に 花折れて立つ

やつかみみ はしぬれど ねもないど

落穂拾いの姉御を拾った 恐山にて

津軽三味線の 音律たかあま ぐひのみこと

だがされど されど木島 みやこじま

いつまで封せど ねこばの

影落ち延びて 地に臥せり

やつがれは しとどぬれて

大河の一滴まで のみほした

ぬれおちど ぷちそいど れおなると はれおから ひとしづく

はれほれ みれをれ

行き場なし 溜り場なし 咲き場なし 馬場愛なし

そうだとしても

すべてをいれて すべてをすてて

本日早々

みなさん 天気は 死にました

みなさん 天気は 死にました

みなさん、天気は、死にました〜！！！！(全員で)

第一幕 イザナミ・イザナギの子探し

子どもがどこに行つたのか？ 何をしているのか？ わからない。子どもの行方を捜す。

天気見太郎「最初だけ、祝詞調で掛まくも畏きイザナギ・イザナミの大神たち。あなたたちはいつどこにいますや。この死に給うお天気様をどう見そなわしますや。日の本の生みの親たるイザナギ・イザナミの大神たち。あなた様のお声が聴きとうございます。」

イザナミ「横目で、奇妙な姿の天気見太郎をチラと見ながら、目の前にいるかつての夫に向かつてイザナギよ、久しぶりじゃ。相変わらずのへあなにやし、えをとこーじゃのう。いい男じゃ。しかし、おぬしとふたたび会うのは、萬代（よろづよ）を経てのことじゃ。

気の遠くなるようなむかしむかし、われらも夫婦（めおと）じゃった。けなげで、いとおいしい、日の本最初（はじめ）の夫婦（めおと）じゃった。われがはじめにおぬしに声をかけたがために（ひるこ）あはしまぐができて、子の数に入れずとなつてしまったが、その（ひるこ）もあはしまぐもだいたいな大事なわれらの子じゃった。そのことを、しっかりと、天つ神々に伝えることができないほど、われも幼くもの知らずであつた。

今となつては、そのことは、間違いであつたとは思つてはおらぬ。間違いでもなんでもなく、むすひの自然（じねん）のままのことじゃつた。だから、そのまま受け入れればよかつたのじゃ。われも未熟（みじく）じゃつたのう。だが、おぬしもじゃ。イザナギよー」

イザナギ「イザナミよ、まことになじぶりじゃ。元氣そつで何よりじゃ。昔のことを変えることはできぬが、われも幼（こ）なかつた。おまえの死を受け入れられなかつたのじゃ。許してくれおまえは今もへあなにやし、えをとめ（こ）じゃ。へあなにやし、えをとめ（こ）ぞ。そのことをずっと詫（わ）びとともにおまえに言（い）つたのじゃが、手立てがなかつた。すまぬ。すまなかつた。われの未熟（みじく）ゆえ、おまえにおおきな（辱）はぢ（く）と悲（かな）しみと怒（こ）りを与（たま）へてしまつた。われの愚（おろ）かさであり、未熟（みじく）さであり、至（いた）らなさであつた。こころからおわびする。今となつては、遅（おそ）いかもしれぬが……」

イザナミ「そつじゃ。遅（おそ）すぎたぞ、イザナギよ。時（とき）が経（た）ちすぎたぞ。その間に、われらの生（な）みし子どもたちがどうなつてゐるのか、見えぬままじゃ。イザナギよ、罪滅（つみ）ぼしに、われらとも、われらの子どもや孫（まご）や子孫（こご）が、どのようになつてゐるか、どうして、何をしているのか、見（み）に行（い）つたぞー」

イザナギ「おうー！ よろこんで、お供（とも）するぞ。へあなにやし、えをとめ（こ）よー！ イザナミよー！ イザナミ！ イザナギよ、われらは新婚（しんこん）旅行（りょこう）なんぞ、とてもじゃないが、できる時代（じ）じゃなかつたのう。神代（かむよ）の昔（むかし）じゃもん。ともに、天（あま）の浮橋（うきはし）に立つて、天（あま）つ神（かみ）から授（たま）けられたアメノヌボコを塩（しほ）コヲロコヲに掻（か）き混（ま）せて、おのずから成（な）つたおの（こ）る島（しま）。そのおの（こ）る島（しま）に降り立（た）つて、みとのまへはひをして、むすばれて、われが島（しま）々（々）を出産（しゅつさん）し、續（つ）いて神（かみ）々（々）を出産（しゅつさん）し、こつして、次々（つぎつぎ）と自然（しぜん）万物（ばんぶつ）を産（う）みなしたのじゃ。そして、火（ひ）の神（かみ）カグツチを産（う）んで、ミホ

トを焼いて黄泉の国に身罷る時も、反吐から金山彦・金山姫などの金属神を、ウンチから埴安彦・埴安姫などの粘土神を、おしっこからミヅハノメなどの水神を産み出したのじや。思えば、次から次へ、よう出産したものじや。吾ながらようやったと、褒めてやりたいわ。」

イザナギ「おう！ ようやったぞ。おまえは。この青人草のニンゲンたちも、元はと言えば、おまえが生み成したもぞ。す「いぞ、イザナミ。ようやった。ようやった。イザナミよ、大妣（おほはは）よ。」

イザナミ「今さら、そう言われてものう。うしくないこともないが、片腹痛いのう。それは、その生み成したわが子の末裔がどうなっているか、わからないからじや。」

イザナギ「この日の本は、どうやら、縄文時代から、弥生時代、古墳時代、律令時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、戦国時代、江戸時代、明治時代、大正時代、昭和時代、平成時代、そして、令和時代の本年、令和六年となりにけり。よろず年が経ってしまつた。その間に、いや、その末に、この日の本は、世界一の超少子高齢化社会となつてしまつた。そんな時代のみぎひたり、来し方行く末がどうなっているであらうのう。」

イザナミ「いやいやいやいや、ともに、見るまいか、見るまいか。疾く疾く早う見てみるとするか、イザナギよ。吾らが子孫の行く末を！」

「こうして、この世巡り、冥界・異界めぐりに出かけてゆくイザナミとイザナギ。

天気見太郎「こうして、日の本元(はじめ)のちちははであるイザナギ・イザナミの大神様たちは、時空を超えて現代の少年少女のもとにまっしぐら。」
(イザナギ・イザナミはこの世と黄泉の境の黄泉つ平坂まで来て、かつてイザナギが道を塞いだ千引の大石のところまで来て、少年少女たちの会話を覗き見る。少年少女がやさぐれた理由については各演技者が自由に物語る。)

ルリア「暗い。暗い。暗い。物がよく見えない。みんな、だいじょうぶか？ 近くに集まってくれ。ぼくたちのこの世界は、もう、終わりかもしれない。あたしは、女として産まれたという。もちろん、このあたしを産んだ母もいる。父もいる。北千束のハイソな家だな。

でも、ぼくは、そんなちちははが、どうしても、どうしてもほんとうの、ほんとうのははちちとは思えなかった。そして、ほんとうの、ほんとうのははちちがどこかにいると、思いつづけてきた。この暗い世の中で生きていくために、ぼくたちは、ほんとうの、ほんとうのははちちを捜しに行「うー」

ジヨバンニ「おとうさんはラッコの上着を持って帰ってこなかったし、おかあさんは死んじゃったけど、ぼくはカンパネルラの星を探しに、もう一回、銀河鉄道に乗るつもりだよ、瑠璃亜(ルリア)。ほんとうのほんとうの、まことのまことのしあわせと父母を探して。瑠璃亜も都留女も鯉太郎も、一緒に往「うー」

(ルリアとジヨバンニが中心となって歌う)

「銀河鉄道の夜」

「この地球から見ると 銀河は白い乳の流れに見えて 夜空を彩る

その夜 ケンタウラスの祭りで ぼくは 不思議な夢を見た

銀河の夜汽車に乗って 星の世界を旅する夢 だった

あの空の果てまで ぼくたち二人で

まことのさいわいを 探しに行「う

カンパネルラの星まで ぼくは旅をする

カンパネルラの星から ぼくは飛んでゆく

この宇宙の中で 地球はいのちと苦悩に満ちた星として輝く

その夜 銀河の渦の中でぼくは孤独な星となる

いっしょに行「うと誓ったきみはどこにいるのか教えて 教えて

あの空の果てまで ぼくたち二人で
まことのさいわいを探しにゆこう

カンパネルラの星までぼくは旅をする
カンパネルラの星から独りで飛んでゆく

あの空の果てまで ぼくたちみんなで
まことのさいわいを探しにゆこう 探しにゆこう 探しにゆこう

都留女(とどめ、少女)「いい歌だね、ジヨバンニ！ 君らしいや。でもね、まことのさいわいなんて、幻想だよ。そんな夢を追いかけてもむなしく崩れるだけ。それは、ニンゲンの歴史が物語ってるだろ？ ぼくたちは、救い難く、度し難い生命種なんだよ。それにさあ、まあ、実の父母にもこんなものか、と思うし、幻想を持たないよ。本当のほんとうの父母なんていないよ。それ、なに？ って、思わないのかなあ。いい加減、目を覚ましなよ。ぼくたちの現在と未来は、汚穢と絶滅にまみれてるのさ。」

鯉太郎「まったく、救い難く、度し難いのは、都留女、おまえじゃないか。おまえも昔は夢見る少女だったのに。いつからそんな、すれっからしになったのだい？ どこにも、夢も希望もないこの世の中がおまえをそんなふうに変えてしまったのかなあ。」

都留女「何、いつまでも、甘いことばっか、言ってるんだよ。だから、鯉太郎は現実を見ない夢見る男、ドリーマーの恋多郎と言われるのさ。20歳にもなって、いい加減、目を覚ましなよ。もう、夢見る未来なんて、ありやしねえよ。ただただ、崩れてゆくだけ、滅びてゆくだけ、死んでゆくだけだよ。だったらさあ、つかのま、今だけでも面白いこととして死んでいこうよ。ほんとうの、ほんとうの父母なんて、無駄な探訪はきっぱり止めてさ。」

鯉太郎「都留女、絶滅していくから、その覚悟があるから、最後まで夢見るという生き方だつてあるんだぜ。」

ジヨバンニ「そうだよ。都留女、瑠璃亜、ぼくたちは、やっぱり、最後の最期に、ぼくたちの夢と希望を遺そうよ。未来に。」

Geor(異星人・宇宙人意識を持つ性同一性障害の少年・少女)「まったく、ンゲンて、ほんと、やっぱりで面倒くさくて奇妙な生き物だな。絶望するし、希望するし、夢見るし。忙しいったらありやしない。ぼくは、未来の波留星からやってきた宇宙人だけど、みんなの探検には手を貸すよ。ほかにする「ともないしね。でも、これだけは最初に言っておくよ。」

ぼくたちは、なんにも行けるし、何でもできるんだよ。ほんとうは、何もできないとか、どこにも行けないかと思ってるのは、自分の意識だけ、心だけなんだよ。ほんとうは、どらえもんを持っている「でも、アアのよう」に、なんでも行けるんだ。さあ、つべこべ言わずに早く出発しようー！」

ジヨバンニ「クイア、ありがとう。みんな、一緒に行こう！ 手を組んで、円陣を作って。さあ、

出発だ。Go!!」

全員で「Go!! 合!! 業!!」

「随天使ロック」 作詞・作曲 つげ春乱(早川義夫)

へ見つめる前に跳んでみようじゃないか

俺たちにはできないこともできるぞ

さあみんなでロカビリーを踊ろう

心は変わりやすいけれど

本当はなにもかわつちやないのさ

まわりだけがぐるぐるまわるのさ

子供の頃は良かったじゃないか

裸でも生きていられたぜ

さあみんなでツイストを踊ろう

ないものねだりだけでも

俺たちの地平線まで

さあみんなでゆこうぜ出発だ

ころがってゆけくずれてゆけ

落ちると「まで落ちてゆけ

咲いた花がひとつになればよい

見つめる前に跳んでみようじゃないか

俺たちにはできないこともできるぞ

さあみんなでブルースを踊ろう

第三幕 異界遍歴 イザナミ・イザナギと少年少女探偵団がともに訪なう

天気見太郎「こうして、現代の少年少女たちは、ほんとうの、ほんとうのちちはを探す旅に出たのです。そして、神代(かみよ)のイザナギ・イザナミの大神様たちも、現今の子どもたちを見届ける時空遍歴の旅に出たのでございました。そして、その結果は如何に？如何に？ 如何なるや？」

① ニーチェ

ニーチェ「ツアラトウストラよ、今日も朝日に目覚めた。わが大きな理性たる身体は明晰に目覚めておるぞ。ツアラトウストラよ。今朝はしかし、奇妙な風が、東からも、西からも吹いてくる。

かつて、地球の橋の極東の日本では、東からの風を東風(こち)と呼んだそうだが、「東風(こち)吹かば匂ひおこせよ梅の花 あるじなしとて春を忘るな」と大宰府に左遷されて悲嘆にくれた大宰府権帥(ださいふごんのそち)の菅原道真是歌を詠んだと云う。

風流じやのう、日本人は。だが、「超人」を説いた吾は違うぞ。ツアラトウストラよ。そんなルサンチマンとセンチメンタルな哀憐に満ちた歌なんぞではなく、もっと明晰な大きな理性の遊戯を見せてくれようぞ。」

(とそこへ、東風に乗って突然少年少女探偵団の面々が現れ、少年少女たちが口々に)
少年少女たち「ニーチェはどこだ？ ニーチェはどこだ？ ココハ、ドコダ？」(と、探り合う)

ニーチェ「くらやみのなかの迷妄の中にいるようじやな、異国の少年少女たちよ。

ニーチェは、そうじやな、さしずめ、地獄の一丁目、吾(われ)が君たちの年齢のころに研究したギリシヤの神話世界ではハーデイスと言った冥界じや。吾はその住民となって、訪れてきた者に、いつ果てるともなく、超人と永劫回帰と大きな理性である身体の哲学を辻説法しているのじや。

身体は大きな理性だ。一つの意味を持った複雑である。戦争であり平和である。蕃群であり牧舎である。とな。」

ルリア「どうしてほくたち、こんなところに来てしまったんだろう。リッパな髭を生やしてもっともらしい理屈を言うおじさんさあ、おじさんはだれなの？」

ニーチェ「東の国からやってきた異邦人の若者よ、吾こそは後世に、二十世紀の予言者と讃えられたフリードリッヒ・ニーチェである。」

都留女「不倫どきつい日輪？ ナンダ、そりや？」

ニーチェ「若者たちよ、よく聴け。吾は宇宙の声を聴いた。宇宙は超人を求めておる。そして、時間は直線になど流れておらん。永劫回帰するのじや。永劫の大車輪を廻すのだ。恐れるな。ルサンチマンも、コンプレックスも、ない。子どものように無垢なのじや。ありのままに、子どものように踊れ、若者よ！」

ルリアと都留女「言われなくても毎日踊り狂ってるよー！」

ニーチェ「おお、それでいいんじゃない。頼もしいのう。」

ジヨバン「ニーチェ先生、それでは、ぼくたちの、ほんとうの、ほんとうのちちはは、どこにいるのでしょうか？」

ニーチェ「カーツツ！ 喝ッ！ たわけめ！ 父母未生以前の面目を知れ！ このやつこめ！ 海は荒れている。一切は海の中にある。さらばじゃ、行くがいい！ 吾が息子と娘と異人たちよー！」

② 空海

鯉太郎「ああ、おどろいた。何だったんだ、あれは。おれたち、どこに迷い込んだんだろ？」
クイア「地獄の二丁目。ハーデイスのアゴラ、冥界広場だよ。みんな、ここがどこにつながっているかわからないけど、この宇宙は多元多様で、穴ぼこだらけ。季節風次第でどこにでも時空誘導されるので気をつけよう。」

空海(僧形の初老の姿で上手から登場)「おお。かつての仮名を児のように道を求める若者たちよ。こちらに来たれ。わたしは日の本に密教をもたらした空海という僧侶だ。」

ジヨバン「えっ、あの、あの、あなたが、あの有名な弘法大師空海僧都様ですか？」

空海「そうじゃ。わたしが空海じゃ。」

ジヨバン「恐れながら、わが師日蓮大聖人も一目置いて灌頂を受けた真言密法の伝道師空海僧都にお訪ね申し上げます。ぼくたちは、ほんとうの、ほんとうのちちははを探している者です。どうか、「ご教示ください。かの『三教指帰』や『秘蔵宝鍵』を解き明かした明晰にして神秘不可思議なその知能をもって。」

空海「今どき珍しい礼を心得ておる若者じゃな。それ仏法は遥かにあらず、心中にしてすなわち深し。父母の恩も海より深し、山より高し、じゃが、ほんとうの、ほんとうのちちはとは、胎蔵界の曼荼羅と、金剛界の曼荼羅の主たるマハーヴァイロチャナ、大毘盧遮那仏、すなわち、すべての根源、大元である大日如来のことじゃ。これこそ、真の父母なり！ よくぞ、問うたな。若者たちよ。」

ジヨバン「では、その大日如来の父母は何者でしよう？」

空海「う、うちゆう、宇宙そのものじゃ。」

ジヨバン「その宇宙の生みの親を知りたいのです。弘法大師空海様、どうかその真の父母をお教えください。」

空海「不生不滅、不増不減、色即是空、空即是色……悠々たり、悠々たり、はなはだ悠々たり……生まれ産まれ生まれ生まれて生(しょう)の始めに暗く、死に死に死に死んで死の終わりに冥し……重々帝網、すべてはつながっておる……ゆえに、三密加持して、即身成仏じゃ。ふしよつぶめつ……」(ジヨバン)「言いながら下手に去ってゆく」

③ 番場の忠太郎

都留女「何言ってるんだろ？ ぼくたちをけむに巻いてさあ。ちんぷんかんぷん。ちちんぷいぷいだよ。」

ルリア「すべては、ざれごと。言語明瞭意味不明だよ。」

ジヨバンニ「ぼくは、先生に言われたんだ。ほんとうの、ほんとうのかみさま、ほとけさまがおわすって。弘法大師空海様は、ほんとうの、ほんとうのちちははって、そのほんとうの、ほんとうのかみさま、ほとけさまだよって、言いたかったんじゃないかなあ。」

鯉太郎「ジヨバンニ、おまえはほんと、物分かりがよすぎるよ。そんなに、物分かりして、どうするんだよ。おれたち、わからないから、たずねあるいているんじゃないか。そんな、中途半端にわかってもらっちゃ困るな。こんなにやく問答なんかに納得してちゃ、だめだよ。」

ジヨバンニ「すなおに」「ごめん、鯉太郎。ぼく、きまじめなんだ。そんな灘の木一本のような自分を変えたいんだ。」

番場の忠太郎（突然登場）「ごめんなすって。ごめんなすって。ごめんなすって。赤城の山も今宵限り。赤城の山も今夜限り。生れ故郷の国定村や、縄張りを捨て、国を捨て、可愛い自分の手めえたちとも、別れ別れになる首途（かど）だ。：：あれっ、こりや、国定の忠治親分の名セリフだっぺ。ごめんチャイ！」

都留女「今度は、心機一転、起承転結、凄い転換だな。くだけすぎだよ、こりや。」

鯉太郎「あなたさまは、何者ですか？」

番場の忠太郎「えっ、ああ、おれっ？ おれのこと？ おれはさあ、真正正銘、生国不明、父母不明の永遠の旅がらす、番場の忠太郎ってあゝ、おれさまのことだわいなあゝ。」

鯉太郎「聞いたことねえな。番場の忠太郎、なんて。」

ジヨバンニ「ぼく、知ってるよ。たしか、長谷川伸原作で、大ヒットした『暎の母』の主人公だよ。」

番場の忠太郎「（できるだけ滑稽に）ピンポーン！ そのとおくり！ そうです、わたしやゝ、その番場の忠太郎でござんす。暎の母を探し求めて、諸国一軒の僧のように、孤独なマラソンランナーのアスリートのように、スティックに母を探し求める旅を続けている一匹の旅烏にござんす。よくぞ、聞いてくださりました。」

鯉太郎「ジヨバンニ、おまえはほんと、何でもよく知ってるな。すげえよ。」

ジヨバンニ「番場の忠太郎親分、どうか教えてください。あなたが探し求めている暎の母は、ほんとうの、ほんとうの母なのでしょうか？」

番場の忠太郎「よくぞ、聞いてくれたわいのう。問題はそこ、それなのさ。ザット・イズ・ザ・クエスチョン。」

ジヨバンニ「番場の忠太郎様、その答えは？」

番場の忠太郎「そうさな。そうだよ。そうなんだよ（自分ひとりだけ納得しつつ）。おりゃゝ、

ほんとうの、ほんとうのおっかさんを探し求めて、何千里。回国行者の旅を続けたさ。そしてどこに行っても、これがまことの、おっかさんにちがいねえ、と思つて、今度はかりはと思つて「おっかさん」と呼んでも、呼んでも、「こんでも、あつ、もとい、ふりかえつてくりやしねえ。ほんとうの、ほんとうのおっかさんなんて、いやしねえのさ。おまえさん。ジンセイ、棒に振るなよ。おれのように。むだなおっかさん探しの旅なんぞ、やめちめえ。ほんとうの、ほんとうのおっかさんなんて、どこにもいやしねえ。面の皷を閉じれば、ほんとうの、ほんとうのなつかしいおっかさんの面影が浮かんでくるのさ。それだけは、否定できねえよ。うん、否定できない。いくら、自己肯定感のうすいおれでも。」

番場の忠太郎「泥の鳥ブルース」(を絶唱する)

「泥の鳥ブルース」

へ身を切るような鋭さを自分に向ける
身を断つような悲しさに我を失う
俺にかまうな 捨て置け あめつちよ

遠さにあこがれる自分にあきれる
近くにいたる君を傷つける自分を恥じる
俺は荒ぶる泥の神 ちちははよ

生れてきてから愛されたことがない
死のうとしても死ねない自分を映う
俺は飛べない泥の鳥 しらとりよ

恋をしても飛べない自分を呪う
怒りの火山に身をゆだねて死にたい
俺は廃墟のガラクタダ 富士やまよ

生れてきてから自分を壊したことがない
一度たりと自分を超えたことがない
俺は飛びたい泥の鳥 始祖鳥よ

生れてきてから自分を壊したことがない
生れてきてから愛されたことがない

Ahu Ahu

鯉太郎と全員」ありがとございました。番場の忠太郎さん。あなたの答えが、一番、心に響きました。よくわかりましたが、もう一回だけ、セカンドオピニオンを求めたいと思います。「(と言つて、少年少女探偵団は去っていく)。

(一人取り残されて)番場の忠太郎」赤城の山も今夜限り……さみしいなあ。つらいなあ。ほっちのおれは……国定の忠治親分、このどうしよもない、やさぐれのおれをひろってくだ〜チャイ！ ちやいちやい、ありや、ちやいなちやいな。「と、踊りながら、上手に消える)

④ おつる(阿波人形浄瑠璃「傾城阿波鳴門」)

ジヨバンニ「ぼくたちの旅は、無駄なのか、徒労なのかな?」

ルリア「あきらめるのか、ジヨバンニ。ぼくはまだあきらめねえ。」

おつる(そこに鈴をチリンチリンと鳴らし、「子を産めるその父母の恩山寺 訪ひがたき」とはあらじな」と四国遍路第十八番札所恩山寺の「詠歌を詠いながら登場」あくれ〜、〜ととさんの名は阿波の十郎兵衛(じゅうろべえ)、かかさんの名はお弓と申します。「ルリア」子どもじゃないか。おまえはだれ? 何者?」

おつる「わらわは、阿波のおつるともうします。ととさんとかかさんを探しに、摂津の国の大阪にいと聞いて、阿波の国から海を渡って、巡礼姿でととさんとかかさんを探しに来たのでございます。わらわと同じ年の子どもはみな、家にいて、ととさんとかかさんと一緒にしあわせに暮らしています。でも、わらわにはそんな(キリリとして)スイートホームもハッピーフアミリーも、ナッシングエルス、なんにもないのでござります。わらわはまだ年端もゆかぬ子どもでございます。ととさんとかかさんを探しているののでござります。「ルリアと都留女」がらにもなくやさしげに「見つかるといひね。」

おつる「おなさけ、ありがとござりまする。(しおらしく)わらわは旅をつづけします。「ルリアと都留女」おう。道中、気をつけるんだよ。」

(おつる、「南無文殊三世の仏の母ときく 我も子なれば乳こそほしけれ」と第三十一番札所竹林寺の「詠歌を詠いながらしらずと上手に去つてゆく)

ジヨバンニ「ああ、悲しい話だなあ。おつるは、有名な阿波の人形浄瑠璃で、近松半二原作「傾城(けいせい)阿波鳴門」第八番巡礼歌の主人公なんだよ。巡礼者の姿で阿波を出て大阪に行ったんだけど、ほんとうのはには突き返されて、ほんとうのうちに殺されるといふ最悪の悲劇のヒロインなんだ。とても、つらい話で、江戸時代に大ヒットしたんだよ。」

全員「そうなんだ〜。(とつくづく感心する)

都留女「そんな話を聞くと、なえちやうなあ。ぼくたちのほんとうの、ほんとうのははちち探しの旅も空しくなっちゃまう。」

(舞台奥の方で、ひそやかに)

イザナミ・イザナギ「子どもたちよ、悲観するでない。おまえたちは、何にもまちがったらん。ほんとうの、ほんとうのははちちはいるのじゃ。おまえたちの「ころ」うちに。たましいのなかに。まぶたのおくに。」

イザナミ(突然歌いだす)「入思い出してらん。五つの「ろ」を。(中島みゆき「五才の頃」)そうじゃ。三つ子の魂百まで、と「つ」とわざも日の本には生まれてきたぞ。」

⑤ マッチ売りの少女、「と、実はもっきり屋の少女コバヤシチヨジ」

(マッチ売りの少女、下手から登場)

マッチ売りの少女「もっきり屋の少女」寒い寒い大みそかの雪がしんしんと降り積もる夜、わたしは、とほとほと寒風の中を歩いてるうちに、馬車にはねられそうになって、大切な木靴を失くしてしまいました。足は凍るように冷たく、おなかもすいて、ひもじい、さびしい思いに泣きそうになっていました。

「どの家の窓にも明かりがあかあかとしていて、おなかガウとなりそうながチヨウの丸焼きのにおいがします。そっかあ、今日は大みそかなんだ。でも、わたしには、帰る家はありません。わたしはみなし児、家なき児。寒さをしのいで、売れ残ったマッチを擦って少しでも両手やからだをあたためているうちに、そのマッチもなくなってしまい、とうとう死んでしまったのです。」

全員「知ってる！ マッチ売りの少女だ！」

マッチ売りの少女「もっきり屋の少女」そう！ わたしはマッチ売りの少女。でも、もっきり屋の少女でもあるの。」

ジヨバン(だけが)「知ってる！ つげ義春の名作漫画「もっきり屋の少女」の主人公コバヤシチヨジだ。」

コバヤシチヨジ「そう。おら、コバヤシチヨジ。むげいのおどっつあは、きぐしねくてやんだ、おら。(向かいの家のお父さんはものの道理が分からなくて私はいやだ)おらは、みじめ、です。せつない、です。コバヤシチヨジは赤い靴が欲しいです。でも、それを買うにはお金が要ります。そのために、おら、乳首をさわらせるのっさ。みんな、頑張れちよじ、頑張れちよじ、チヨジ、と応援してくれるっけど、いっつも五分も我慢することができず、お金をもらえないのっす。おら、みじめです。せつないっす。死にたいっす。」

ジヨバン(「チヨジ、ぼくはがんばれ、とは言わないよ。言えないよ。チヨジ、そこ」から逃げよう。ぼくたちといっしょに、ほんとうの、ほんとうのははちちを探しに行こう！)

コバヤシチヨジ「おら、みじめっす。せつないっす。しにたいっす。でも、おら、おめえについていくっす。」

少年少女探偵団全員「いっしょに行こう！」

(コバヤシチヨジを含む少年少女探偵団全員が「銀河鉄道の夜」の最後のフレーズと一緒に歌う)

へあの空の果てまで ほくたちみんなぞ
ま「どのさいわいを探したゆ」う 探したゆ」う 探したゆ」う

⑥ デロリンマン

デロリンマン「みんな、聞いてくれ。この冥界の十字路、ハーデイスの広場で。おれは、デロリンマン。むかし、三四郎と名乗っていた。だが、自殺未遂をしたために、こんな顔になっちゃった。

だからこそ、おれはデロリンマンとなって、人間を救うのだ。ポロポロのマントをひるがえし、赤フン一丁で街を歩いて、おれは神だ、魂のふるさとだ、と言って回ったが、妻のママ子にも、息子の四郎にさえも、邪険にされて追い返されて、嘲笑われた。

けれども、おれはへこたれない。くじけない。めげない。何度踏みにじられても、踏みにじられても、また立ち上がるのだ。そして、愛と正義の世の中をつくるのだ。オロカメンや紅トカゲにバカにされ、攻撃されても、何度も何度も殺されそうになっても、おれは立ち上がる。おれはよみがえる。おれはめげない。おれはくじけない。おれはデロリンフンドシ族」

(ギンギンのエレキが鳴り響き、赤フン一丁でデアロリンマンが「フンドシ族ロック」を絶叫する)

「ふんどし族ロック」

へおまえのフンドシ 赤フンか 空を飛んでゆけ
おれのフンドシ 青フンよ 海を越えてゆけ
いつまでたっても おれたちは フンフン族 フンドシ族

おまえのフンドシ 金フンか ビルを抜けてゆけ
おれのフンドシ 白フンよ 巷を泳いでゆけ
自由を愛する おれたちは フンフン族 フンドシ族

気が気でねえよ おれたちは

シリ貧民族 少数民族 マイノリティ フンフン族 フンドシ族

言わずと知れた おれたちは フンフンフンドシ族
言挙げしないが おれたちは フンフンフンドシ族

この世の悪に 立ち向かう フンフンフン族 フンドシ族

おれたちや 敵に立ち向かう パンツ・グローバリゼーション

世界にや 多様性が必要よ アンチ・ファンダメンタリズム

自由を愛する おれたちは フンフンフン族 フンドシ族

誇りを持つとっぜ おれたちは

尻賣民族 少数民族 マイノリティ

フンフンフン族 フンドシ族

あ フンフンフン族 フンフンフン族 フンフンフン族 フンフンフンドシ族

⑦ 宮沢賢治

「フンドシ族ロック」の余韻に浸り、首をフリフリしながら登場してくる宮沢賢治。

宮沢賢治「そう。フンドスの君よ。わだぐすはへこたれそうになって、立ち上がるために、『春と修羅』と『注文の多い料理店』を書き上げて自費出版したのす。千部も、だなす。だども、十冊も売れなかったな、のす。稗貫農学校の生徒たちも、ちんぷんかんぷんと言ったのす。そこで、わだぐすは「度十公園林」をつくったのす。」

ジヨバンニ「あっ、ケンジにいちやん！ ぼくの生みの親。ぼくの、アバターお父さん、かな？でも、ほんとうの、ほんとうのお父さんかもしれない。」

宮沢賢治「わだぐすめは、みんなに笑われ、石を投げつけられてもぐじけない、へこたれない、めげないデロリンマンに、度十とデクノボーとおなじたましいを感じるのす。」

からだはうそをつかない。

が、「ころはうそをつく。

しかし、たましいはうそをつけない。

宮沢賢治と少年少女探偵団が交互に群読

「わたしたちは、氷砂糖をほしくらいもたないでも、きれいにすきとおった風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむ」ことができます。

またわたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろつどや羅紗や、宝石いりのきものに、かわっているのをたびたび見ました。

わたくしは、そういうきれいなたぐものやきものをすきです。

これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。

ほんとうに、かしわばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかったり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立ちたりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるようでしかたないということを、わたくしはそのとおり書いたまです。

ですから、これらのなかには、あなたのためになるところもあるでしょうし、ただそれっきりのところもあるでしょうが、わたくしには、そのみわけがよくつきません。なんのことも、わけのわからないところもあるでしょうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。

19

(途中からみんなで合唱)けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたり幾きれかが、おしまい、あなたのすきとおったほんとうのたぐものなることを、どんなにねがうかわかりません。』注文の多い料理店』序)

宮沢賢治「わたくしはいのりです。ねがいます。ほんとうの、ほんとうのかみさま、ほとけさまに。いのりです。ねがいます。ねさげます。」

ジヨハン「すきとおったほんとうのたぐものって、ほんとうの、ほんとうのははとちちのことですね? ケンジおっとういー」

宮沢賢治「農民芸術概論綱要」序

「おれたちはみな農民である。ずぬぶん忙がしく仕事もつらいもつと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい
われらの古い師父たちの中にはさういふ人も応々あった

近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於て論じたい
世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない

自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する

この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか

新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある

正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである

われらは世界のまことの幸福を索ねよう 求道すでに道である」

ジヨバンニ「われらは世界のまことの幸福を索ねよう 求道すでに道である」

全員で「新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある

正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである

われらは世界のまことの幸福を索ねよう 求道すでに道である」

全員で「君の名を呼べば」と「神ながらたまちはへませ」を絶唱する。

「君の名を呼べば」

へああ ああ ああ ああ ああ ああ

君の名を呼べば 君の名を呼べば

君の名を呼べば 君の名を呼べば

打たれて 雨(アーメン)

ああ ああ ああ ああ ああ ああ

君の名を呼べば 君の名を呼べば

君の名を呼べば 君の名を呼べば

ごしやぶり 雨(アーメン)

南無妙法蓮華経 南無妙法蓮華経 南無妙法蓮華経 南無妙法蓮華経

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

のうまくさまんだけーたらだんせんだんまかろしやだそわたやうんたらたかんまん

おんあぼぎやへいろしやのうまかぼだだまにはんどまじんばらはらばりたやうん

のうぼうあかしやきやらばやおんありきやまりぼりそわか

オンアマリタテイセイカラウン オンアマリタテイセイカラウン オンアマリタテイセイカラ

ウン(3回)

オンソラソバテイエイソワカ オンソラソバテイエイソワカ オンソラソバテイエイソワカ

(3回)

南無神変大菩薩 南無神変大菩薩 (3回)

南無大師遍照金剛 南無大師遍照金剛 南無大師遍照金剛 (3回)

南無日蓮上人南無日蓮上人南無日蓮上人南無日蓮上人南無日蓮上人 (3回)

オンマニペメフーム オンマニペメフーム オンマニペメフーム オンマニペメフーム (4回)

キリエエレイソン キリエエレイソン キリエエレイソン キリエエレイソン (4回)

アラークバル アラークバル アラークバル アラークバル (4回)

神ながらたまちはへませ 神ながらたまちはへませ 神ながらたまちはへませ 神ながらたまちはへませ (4回)

ギヤータイ ギヤータイ ハラギヤータイ ハラソウギヤータイ ボウジソウワカ 般若心経

ああ ああ ああ ああ ああ

君の名を呼べば 君の名を呼べば

君の名を呼べば 君の名を呼べば

どしやぶり 愛(会い、合い)

「神ながらたまちはへませ」

へ神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

岩陰よりしみ出して来る 水を探して 夢を探して

向こう岸に渡る 向こう岸に渡る

夢を開いて 夢よ開けと

あはれあはれ はへ あはれあはれ はへ

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

なけなしの夢が壊れて 行く当てもなく流離う

尽十方未来際 尽十方未来際

夢を開いて 夢よ開けと

天晴れ天晴れ はへ 天晴れ天晴れ はへ

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

良夫「アクメよ、しかし、これで終わりではないぞ。次の世があるぞよ。」

流太「ヨシオよ、だがのう、次の世も同じではないかのう。果てしない、終わらないニンゲンという種族の宿業じゃよ」

良夫「それでも、希望を託すぞ、おれは。希望を捨てたかないんじや。あきらめとうないんじや。おれたちがあきらめたら、ほんとうにおしまいじゃけん。」

悪売・流太「ヨシオよ、おまえは、ほんま、ノー天気じゃ。お天気様も呆れとるわ。ほなけんど。おまえんようなやつがひとりくらいおらんどのう。ほんま、世も末じゃけん。ヨシオよ、がんばってつかあさい。まかせたぞ。」

良夫「おう！ よかたい！」

天気予報官・天気見太郎「かくして、とうとう、ついに、アットラースト、ファイナルファンタジー、ジ・エンド・オブ・ライフ、みなさん、天気は死にました。みなさん、天気は死にました。みなさん、天気は死にました〜！」

みなさん天気は死にましたⅡ（おのころ村の3人で朗詠）

みなさん天気は死にました

「ころの準備はいいですか？」

からだの準備もできてます？

たましいの準備はいかがです？

みなさん天気は死にました

でも、死んだとはいえ天気はありまする

狂天慟地の天気ではありませんが

前人未到把握不能のお天気ですが

みなさん天気は死にました

どうして天気は死んだのか？

だれもほんとうの答えはわかりませんが
でもだれもがうすうすわかっています

みなさん天気は死にました

曇りのち晴れとか晴れのち雨とか

天気予報官も上がったり
天気に振り回されることもなく
みなさん天気は死にました

むかしむかしそのむかし
秦の始皇帝の時代に天気予報官が現われて
皇帝様に天の気を伝えました

よしよしおまえは愛い奴じゃ
天気の一つも飼ってみろ
俺の意思を天に伝えて天命としろ
そこから天気への脅迫が始まりました

みなさん天気は死にました
秦の始皇帝ばかりではありません
あらゆる時代のあらゆる為政者は
天気のことを気にはしながら天気を憎みました
思い通りにならないもの すぐろくの賽 賀茂川の水 僧兵
いや一番思い通りにならないものは 天気のことを「ごいませ

みなさん天気は死にました
天気のことをだれもがわからず
天気のことをだれもが通ぜず
天気はしだいにくるって孤独死してしまっただけであります

みなさん天気は死にました
誰にも何処にもまんべんに
いろいろ気配り天配り
配りすぎて疲れ果て
どうするすべもないままに
みなさん天気は死にました

みなさん天気は死にました
葬儀を行う人はいませんか？
どんな葬式必要ですか？
いのりのりのりです

みなさん天気は死にました
みなさん天気は死にました
ナポレオンもヒトラーも豊臣秀吉も侵略できなかったもの
それが天気だったのに
どうしたことか あろうことか
みなさん天気は死にました

悲しみに満ちた追悼メッセージ
不安にあふれた警告メッセージ
怖ろしいばかりの脅迫メッセージ
そのどれもがどうすることもできない不可能性のトーン

みなさん天気は死にました
天気予報がなつかしい
ああ天気よ天気帰って来ておくれ

みなさん天気は死にました
曇りも晴れも雨も雪も台風もない

みなさん天気は死にました
ぼくらもともに死にましよう
ぼくらもすべなく死にましようか

みなさん天気は死にました
でも 死んでも終わりではありません
死んで花実が咲くものか と言いますが
死んで花実も咲きます

みなさん天気は死にました
でも 死んだあとは よみがえるだけ
あとは 野と成り 山と成る

みなさん天気は生まれます
みなさん天気は阿礼まする
みなさん天気は生まれませ

「悲の岬Ⅱ」(天気予報官が朗読する)

深い夜の瞳の底でアンテナは疼いた。音信絶対不能の音源を逆探知したが事切れてしまった悲劇的な預言者を叩く。耳孔の奥でトマトが潰れマグネシウムの閃光が散らばった。神父は手旗信号を使って必死の面持ちで十字を切ったが誰も気にせず通り過ぎた。夜空を染める無関心と進む涙のような流星。帰って来い。暗号解読が遅れたため避雷針が裂けて粉々に砕けた。もう一步も先に進めない。三歩退いて倒立したまま巫女は緋袴を翻して昏睡した。懐かしさこそ誘惑の手口なのに。忘れるな。未来を覗く窓が指揮棒で激しく割られていた。空に向かって牛乳を撒き散らした。ハレルヤを叫びながら白色驟雨に撃たれ南十字星に内臓を驚攪みされたまま遠くの遠くまで嘆きの河を渡って往く。その日始祖鳥は翔ぶ空を切なく探した。

「メロン」

メロン

棚の上の骨壺を抱いて 夕焼けの散華の海に入る
人知れず葬りの蛾 矢板の上に意気消沈した雪だるまが 悶えた

この世の果てまで飛んで来たよ 誰にも見られず 何人にも咎められず
靴下を履いたまま飛び込んだ おまえの胸に

メロン

防ぎようもない空と 喘ぎ見るばかりの おまえの喉元
ぬめりと流れてゆく舌先を 衝立は途絶えた

メロン

何とこいつかしさの奥に
蜜蜂がつつき合って 互いを刺し殺す現場を
生まれたばかりの 二日月の生卵 割れぬまま呑み込んだ おまえの度量
いくばかり いかばかりかと 捨て石に訊く 死後の生存を

名ばかりの孤独に 唯名論者は躓く

明日を信じなくせに 明日を待ち望む偽善者よ

サンクトペテルブルグまで 日傘をさして

揺籃の扉 消え果てし秀妻 海鮮問屋の蛸と消ゆ うつばりの夜汽車で

さあひらいて おまえのまたを

ちのはてまでつつく あめのやちまた

だがちまたには 季節外れの雪が 降っていた
熱帯夜のメコンの夜なのに

恐れ多くも長くも 狂天慟地の風上がる

だがたとえ 天地がひっくり返っても

あめつちをつなぐ母なる河として

あなたは 流れつつける

この世の果てまで

地の涯てまでも

この世の果てまで 地の涯てまでも

この世の果てまで 地の涯てまでも！

「いのちのうた」(全員で静かに合唱。次第に盛り上がっていく)

へ 死にゆくもの 生まれいづるもの

ともに刻む いのちのうた

生まれいづるもの 死にゆくもの

ともに歌う いのちのうた

振りかえっても 届かない

仰ぎ見ても 見わたせない

思い出す みるせう

もとはじめの音が ひびく

やなごせう ふうくせう けいけい けいけい けいけい

気づかなかったよ 大抵よ
あなたのいのりと ねがい

やさしき うつくしき ねがいのふかさ
気づかなかったよ 大抵(おおは)は(よ)
あなたのいのりとねがい

やさしき うつくしき いのりのふかさ
やさしき うつくしき ねがいのふかさ
やさしき うつくしき いのりのふかさ
やさしき うつくしき ねがいのふかさ

いのり ねがい いのちの深さ
いのり ねがい いのちの遠さ
いのり ねがい いのちのうた
いのり ねがい いのちのうた